旭川医科大学　回顧資料（７）　昭和54年度

入試制度の大改革と本学の対応
――ユニークな小論文の問題――

まず、1979（昭和54）年の国内外の主要な出来事を拾ってみよう。元日に米中国交回復が実現し、アメリカは台湾と断交した。１月25日には上越新幹線の大清水トンネルが開通した。これは世界最長の山岳トンネルである。翌26日には大阪市住吉区の三菱銀行北畠支店で猟銃人質事件が発生した。この事件は、28日に大阪府警の狙撃隊が同支店に突入して犯人を射殺したことにより解決をみた。プロ野球界では、ドラフト制度の根幹にかかわる、いわゆる「江川問題」が前年からくすぶり続けていたが、１月31日、かねてから巨人軍入りを強く希望してきた、法政大学野球部でピッチャーとして活躍した江川卓が、彼をドラフトで１位指名した阪神球団に取り敢えず入団し、その日のうちに巨人軍の現役ピッチャー小林繁と交換トレードが成立して問題は一応の決着をみた。

５月４日にはイギリス総選挙で保守党が圧勝し、サッチャー党首がいわゆる先進国で初の女性首相に就任した。５月12日には初の本州四国連絡橋である大三島橋が開通した。６月28日には第５回主要先進国首脳会議が東京で開催された。いわゆる東京サミットである。ちなみに、ホスト役を務めた日本の首相は大平正芳であり、ときのアメリカ大統領はカーターであった。８月21日には、第61回全国高校野球選手権大会で和歌山県の箕島高校が春秋連覇を成し遂げた。そして10月には、経済団体連合会（経団連）・日本商工会議所が、ダイエー、イトーヨーカドーなど大手スーパーの入会を初めて認めたことにより、日本の流通革命は名実ともに大きく進展した。

12月27日にはアフガニスタンでクーデターが勃発し、この政権を擁護すべくソ連軍が介入した。この事件はソ連に対する西側主要先進国の大きな反発を招き、翌1980（昭和55）年には、日本やアメリカによるモスクワオリンピック参加ボイコットにまで発展する。ちなみに、大晦日に発表された第21回日本レコード大賞には、ジュディ・オングの「魅せられて」が輝いた。

さて、1973（昭和48）年に医学部医学科のみの単科大学として開学した旭川医科大学は、上記のような国内外の出来事に彩られた1979（昭和54）年の３月に、初めての卒業生78名（男性75名、女性３名）を社会に送り出した。このうち、同年春の医師国家試験の合格者は73名で、93.6パーセントという全国屈指の合格率であった。この第１期卒業生と入れ替わるかたちで同年４月に入学したのが第７期生である。この年から定員が20名増え、入学者は120名となった。しかも彼らは、第６期生までとは全く異なる入試制度によって入学を許可された面々であった。すなわち、全国の国公立大学に共通する一次試験と、大学独自の二次試験である。

それまで、全国の国公私立大学では、最初から最後まで各大学が独自に入学試験を実施して入学を許可する者を決めていたが、試験には珍問・奇問の類が続出し、受験生・高校教育関係者をはじめ多くの国民の批判の的になっていた。しかも、国公立大学には３月上旬に試験を行なう一期校と３月下旬の二期校とがあり、後者の場合、いわゆる「二期校コンプレックス」が学生・教員双方の間で問題となっていた。ちなみに本学も二期校に属していたが、難関の国立大学医学部という自負もあってか、さほど問題にはなっていなかったようである。

そのような、各界各層から指摘されていた数々の不合理に対処するため、この年から、全国の国公立大学は一期・二期の区別をなくして試験日を一本化し、まず１月に、受験生の基礎学力をためす５教科７科目の共通一次試験を実施し、３月初旬に各大学独自の二次試験を実施するようになった。一次試験が「浅く広く」基礎学力を

問うのに対し、二次試験は、入学後の専攻分野に対応する少数の科目によって能力・適性を「深く狭く」みるというのがたてまえであった。共通一次試験元年にあたるこの年、同試験の受験者は現役・浪人あわせて32万7163人であった。

旭川医大においては、開学当初からの旧制度入試では、国語（現代国語・古典一乙必須）、社会（倫理社会・政治経済・日本史・世界史Ｂから２科目選択）、数学（数学Ⅰ・ⅡＢ・Ⅲ必須）、理科（物理Ｂ・化学Ｂ・生物から２科目選択）、外国語（英語・ドイツ語から１科目選択）が課されていた（４期生からは、国語から古典乙一が除外された）。それが、この入試制度大改革と高校学習指導要領改訂とにより、本学独自の二次試験として、数学Ⅲ・物理Ⅱ・化学Ⅱ・小論文・面接が受験者全員に課されることになった。

二次試験科目から国語・社会・外国語が除外されたのは、共通一次試験レベルの学力があれば十分と判断されたためであろう。逆に、数学や理科（物理・化学）では、一次試験では決して問われない、より高度な内容が出題された。生物が出題されなかったのは、本学入学後に生物学教官の指導によってみっちり学習すればよい、というスタンスに立っていたからであろう。面接や小論文は、いわゆる学力試験では判定できない、医療者としての適性や器量などを判定するための一助として導入されたものと思われる。

いまでこそ多くの大学入試で当たり前のように課されている面接や小論文が、入試の一環として広く定着するようになったのは、この1979（昭和54）年度の共通一次試験導入に伴ってのことである。面接では志望動機その他、受験生に問われる内容はパターン化されがちであるが、逆に、各大学がユニークさを競い合ってきたのが小論文である。同年における本学の小論文の問題も、きわめてユニークなものであった。

その問題の全文を示そう。テーマは「知と愛について」である。「知は愛にまさるのか　愛は知にまさるのか。あなたの考えを論述しなさい。」ちなみに、字数は800字以内、制限時間は90分であった。出題者・採点者・採点基準などに関しては、資料が残っていないので定かではない。

ともあれ、このようなユニークな小論文の出題は、本学ではその後も10年以上にわたってつづき、年度によってはマスコミの話題をさらったこともあったが、その全体像については、功罪も含めて、いずれ、この回顧資料のコーナーでまとめる予定である。

（旭川医科大学　歴史・哲学　近藤　均）